呪い館

はなぞのみおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
呪い館

【Ｎコード】
Ｎ７８５４Ｄ

【作者名】
はなぞのみおん

【あらすじ】
私が行ったお店はなんだか…変？このお店に行ってから私の生活は狂い始めて？

前半

「ねぇ、もしあなたが・・・・・」

あたし雁屋禰穏（かりやねおん）

あの日までは普通の少女だった、そうあの日までは。

「あ～ぁ、かったるぃ」

「ねー、学校なんかやだぁぁぁぁ」

「さぼりてぇ」

なんて気ままなことをいっていた。そんなときに出会ったの、あの呪い館に。

「ねぇ、あのお店前からあったけ？」

亜離吾（ありあ）がいった。

確かにそこには見慣れない店があった。

「へぇ！結構いい感じの店じゃない！」

何か分からないけど、そのお店に入ってみたいという感情があった。

ほかの皆もそうだった様で、

「あそこはいってみない？」

と、口々にいい出した。

　カチャリ、ドアを開けると桜の花びらの模様が描かれている壁が見えた。

「こんにちは、何をお求めですか？」

感じのいい２５歳ぐらいの男の人が出てきた。

「あの…ここは何をうっているお店なんですか？」

恐る恐る聞いてみた。

男の人は顔色一つ変えずに

「あぁ、あなたの望む物ですよ」

「でもこのお店・・何も無いですよ」

「いいんですよ。あなたがほしいものはすぐにお取り寄せできますから」
あたしは、意味がよくわかんなかったけど、壁全体が桜柄で、圧迫されている気がして、気持ち悪くてなにがなんだかそこからはわからない。
でも微かに　ソメイヨシノは・・・と聞こえたような。
　それから5年の日々がたった。
私は今年高1になる。でも私は最近世の中が嫌になってきた。
なぜならかわいいからってひいきされたり、頭いいからって尊敬されたり、私特にかわいいわけじゃないし、頭いいわけじゃない
何のために生きてるのかわかんない。働いても、勉強しても結局死んで終わっちゃうじゃない。親もうるさいし…
そんなとき目の前に呪い館が現れた。
「あれ？新しく出来たのかな？」
そんなことを考えながらお店に入ってみた。
でもあの時もっと深く考えれば良かったんだ。短時間でお店が出来るわけがないってことを
「いらっしゃいませ」
そこには5年前と変わらない顔で男の人が立っていた。
「こんにちは」
挨拶をしてから気がついた。！この店何も売ってなかったはずなのに色んな物がある！
「お店・・中に商品入れたんですね」
私が言ったら、
「え？ここにある商品は出来た当時からおいてありましたけど」
「でも5年前来たときには何もおいてなかったですよ？」
「ああ、それはあなたに必要なものがなかったからでしょう」
？？？？？
「まぁなにかいいものがあるかもしれませんから見てってください」

前半（後書き）

よんでくれてありがとうございます
頑張って後半かくんでよろしくおねがいします！

後編

「え…」
男の人がにやりと笑いながら額に手をかざした。
怖いっ
そう思い、目をぎゅっと閉じた。
「あなたが望むもの…それは…楽しい人生！ちがいますか？」
あぁそうだ。人生が楽しかったら・・・そう思った。
「では私がかなえてあげましょう」
「出来っこない、そんなこと」
「いいえ。ですが一つお願いがあります。」
お願い？なんだろう
男の人は私の心を読み取ったように
「べつに大変な事ではありません。その変わった人生の中で、欲を出してはいけません。欲を出したらあなたは一生後悔する」
「何を？」
「知らなくていいことです」
「では」といい、男の人が手を上げた瞬間、身体がふっと軽くなった。
・・・ん？
気がつくと学校の保健室にいた。
あれは夢？
「あぁ、気がついた？あなた校門の前に倒れてたって友達が泣きながら教えに来てくれたのよ」
保健の先生がいった。
「友達によっぽど好かれているのね、あなた」
夢じゃなかったんだ！今までだったら私のために泣いてなんかくれなかった。逆にうっとうしい存在って感じだった。
「禰穏！なんともない？よかったぁ」って泣きながら友達が入って

きた。
あ、忘れてたこの感じ、友達がいるって凄く幸せなことだって・・・・・・・・でも、プレゼントとかも持ってきてくれたらよかったのにな。
「欲を出しましたね」
男の人の声が聞こえた。
あれ？しゃっべてないのにどうして欲を出したのわかったんだろう？

ここはどこ？
冷たいし寒い。気がついたらここにいた。
「やっと起きましたか」
「ここはどこですか」
声は聞こえるのに男の人の姿が見えない
「そうだろうね」
また私の心を読んだように答えが返ってくる
「教えてあげようか？ここは土の中。でもただの土じゃない。君のような子が何人も埋まってるんだ。なぜって、美しい花を咲かせるためさ。その花はね、桜だ。君はこんな言い伝えを知っているかい？美しい桜の木の下には死体が埋まっているっていう・・・その言い伝えは本当だったのさぁ。それも限られた種類でね、ソメイヨシノしかだめなんだ。昔の人はそれを知っていたんだろうね。花言葉は死だ。」
ずぅっと話し続けていた男の人はパタッと話すのをやめた。
「静かにしてて、君の養分を上手くすえないって言ってる」
桜の気持ちまでわかるの？
「あぁもう君もしゃべれなくなってきただろう。最後に教えてあげよう僕の正体を、僕は、悪魔だ。人間には知られてないだろうが、僕たちは本来人間の願い事をかなえて喜ばせていたんだ。だけど先

祖の一人が僕たちはよくしてあげているのに人間は何も僕たちに恩返しをしてくれないことに気づいたんだ。人間は自分を一番に考えるものだからね。そこで条件を作ったのがこれさ、欲張ろうとした人間を木の養分として使おうってね。君も本望だろう美しい花の一部になれるんだから、大丈夫誰も心配しやしないさ。気づかなかった？僕たちは昔からこの仕事をしてきたんだよ？それなのに一度も事件として取り上げられてない。それは、昔は神隠しということにして、今はその人の存在自体忘れさせてる。まぁここにたどり着くのは大体いなくなっても誰にも心配されない人たちだけどね。」

「バイバイ」

「そういって悪魔は消えたんだってさ」

「へぇ」

「でもサ忘れられてるんでしょ。何でこの話が出来たの？」

「いなくなっても心配されないような人の記憶は別に消さなくていいと思った悪魔がいたからなんだって」

「ふぅん」

ちょうどそのころ、教室の隅でこの話を聞いている少女がいた。

「どうしよう。あんな話聞いちゃったら・・・でももしあったらいじめられないようにしてもらうのに・・・」

そのとき見慣れないお店が目に付いた。

その中で若い男が静かに優しく笑いながら手招きしていた。

後編（後書き）

感想読んだ人は絶対かいてください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7854d/

呪い館

2011年1月12日22時43分発行